

【論文】

道徳教育におけるロール・プレイングの可能性

Possibilities for the use of role-playing in moral education

時 田 学
TOKITA Gaku

目次

1. はじめに
2. 道徳教育の歴史と現状
3. 「役割演技」の果たす役割
4. 「役割演技」からロール・プレイングへ
5. 試行的調査
6. 考察とまとめ

(要旨)

本論文は、道徳教育としてのロール・プレイングの可能性について検討したものである。はじめに、道徳教育の歴史的経緯について検討した。道徳教育は我が国近代教育の構築と密接な関連があった。しかし、近代教育システムの確立の後の第2次世界大戦の敗戦という流れに翻弄された過去を持つが、現在の教育環境を背景に道徳教育を行うことの必要性が再認識されている可能性を認めることができた。そこで、道徳教育を行っていく中で、「役割演技」の道徳教育（道徳科）での役割について検討を行った。またさらに道徳教育の学習を効果的に進めるために「役割演技」とロール・プレイングの関係について検討を行った。それらの検討を基にして、今後の展開を検討する場合に ①役割演技という言葉について、②集団としてのかかわりに関して、③役割の固定化を避ける、などの点を検討していくことが指摘された。これらの諸点を改善することを通じて、ロール・プレイングを道徳教育中に取り入れる可能性について検討した。最後にロール・プレイングを効果的に教育現場で活用するための問題点を検討した。

1. はじめに

道徳教育とロール・プレイングの関係を考える中で、道徳教育と「役割演技」という言葉を考えることは学習指導要領などの観点から意味のあることと考えられる。「役割演技」という言葉は私たちの身の回りではあまり使われている言葉とはいえないであろう。一般的な辞書の中に記載されている言葉として「役割演技」は色々な意味があるとは理解されるが（松村，2017），所謂心理学特に臨床心理学領域では、グループ・アプローチに基づいた心理劇的アクションメソッドと、捉えて良いのではないかと推察される。あるいは教育領域であれば心理学領域とは若干異なった意味を持つ部分もあると考えられるが、本稿では道徳教育（道徳科）とロール・プレイングを考えるにあたって、学校教育場面の中で用いられる「役割演技」という言葉にまず焦点を当て検討することとした。

「役割演技」という言葉は教育の中では「道徳」という言葉と関連が深い言葉である。後述する歴史と現状で詳述するが、第二次世界大戦が終了し、教育改革がなされる中で、道徳教育は一時期の間実施が見合された事実があった。しかし1958年（昭和33年）に行われた学習指導要領の改訂により、「道徳」という観点からの指導を学校教育（小学校・中学校）の中で行うことが再び記載され、実行されることが明確化された（道徳の時間（小・中学校）を各学年・毎週1単位時間実施）（文部省，1958）。そしてその「道徳」は今現在、初等中等教育の中で教科化されることが決定し周知期間を経て実施されている（小学校は2018年度、中学校は2019年度より道徳科として実施）。

そのような変遷をたどってきた「道徳」に関する教育ではあったが、「役割演技」との関連については、初めて「特設道徳」の指導方法の中に明記されたのが、「劇化」という

言葉であった。当時の学習指導要領の記載の中には、「……話し合い、講師の説話、読み物の利用、視覚教材の利用、劇化、実践活動等の諸法を適切に組み合わせ……」との表現として記載されていた（文部省，1958）。そして、その後の学習指導要領の改訂が行われ（文部省，1968）。小学校学習指導要領（指導書道徳編）の中では、「役割演技」という言葉に改められて記載がなされて（文部省，1968）現在に至っている状態である。

このような変遷を経た「役割演技」ではあるが、文部科学省による学習指導要領の改訂については、学校における道徳教育は、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行うとの主張が従前より強くより明確に打ち出していることが明らかになっている（文部科学省，2017）。勿論その改定の経緯から考えると影響は初等中等教育に限定されるとは推察されるが、特に今回の主張の中では本稿で取り上げる「役割演技」など「道徳的行為に関する体験的な学習」を積極的に活用することが必要であるとされ、今後の初等中等教育の中で学校での道徳教育を含めた現場実践を考えると「役割演技」が重要な役割の担い手であることが提示されている。一方では、現在の教育現場の状況で「役割演技」が、表面的な理解のまま実施されたり、それが引き金となって誤解が生じたり、適切な教育的な対応がなされなかったりする可能性もあるのではないかと推察される。例えば、早川（2014）（2017）は実際の学校現場の指導の中で、「役割演技」が理解の無いまま実施されたり、誤った指導が引き起こしたりする事実について警鐘を鳴らしている。また、今枝（2014）は手法の特性から個人の内面に踏み込むような作業をしている可能性が高いため、実施の際には注意する必要があることを指摘している。

次世代を担う人間を育てるのが教育であるとするなら、現在学校で行われている、或は行われようとしている「役割演技」について

は、その実施に際し子供たちが危険な状態に置かれる可能性を少しでも回避することは危急の課題であると考えられる。勿論、道徳教育について様々な観点から研究・研修活動が行われていることは重要であろうが、「役割演技」という手法を直接的に研究・研修している観点からの論考はあまりみられないのが現状である。私たちの未来を担う、大切な人的資源である子供たちに、「役割演技」が適切に機能することが叶うようロール・プレイングを中心に当該分野を研究する立場から、歴史的な経緯を踏まえ現状を正しく認識し、その上で効果的な方略を模索するための基礎的な検討を行ったので教育現場に対して多少なりとも意義ある情報発信となると考え以下の論考を行った。

2. 道徳教育の歴史と現状

はじめにでも触れたが、本邦において、道徳教育については近代公教育の構築と密接に関係がある。歴史的には学制の公布を通じて国民皆教育を目指した（豊泉，2015）。その中で修身科が置かれることとなった。この時手本とされたのはフランス学制であるとされ、宗教を導入することなく独立の教科目として確立させた（勝部・渋川，1984；豊泉，2015）。しかし、学制を廃止し教育令に改める中で、学制の硬直的な立場を改め教育の権限を地方に委ね、就学の条件を緩める措置を講じた（勝部・渋川，1984；豊泉，2015）。この一連の流れの中で手本とされたのはアメリカの教育制度であった（勝部・渋川，1984；豊泉，2015）。一方1880年（明治13年）教育令が改正され（改正教育令）就学について督励されることとなった（勝部・渋川，1984；豊泉，2015）。この時に小学校教科の筆頭に修身科を設置し「教学聖旨」を基にそれまでの欧化政策を改めて儒教を基本とした修身科の教育の端緒となったと考えら

れる。これらの動きと相前後して、修身科で使用する教科書についても国が積極的に関与することとなっていった（豊泉，2015；江島，2016）。またこの動きと相前後して儒教を中心に据えた道徳教育の内容に質的に転換していったとされる（豊泉，2015）。

1886年（明治19年）には学校制度の改革を行い、帝国大学令をはじめとして、初等中等教育に対する法の整備がなされた（勝部・渋川，1984；豊泉，2015）。制度的な部分が整った後、1890年（明治23年）「教育二関する勅語」が下賜されたことによって、その後の徳育についての教育内容に関する点について方向性が決定されたとされている（海後・仲・寺崎，1999；豊泉，2015；江島，2016）。前記した勅語が下賜された直後から徳育を教授するための修身科において教科書の国定化を進める動きが示されるようになったとされ、この後5期にわたって国定修身書が作成されることになる（勝部・渋川，1984；豊泉，2015；江島，2016）。

このような変遷をたどっていた道徳教育であるが、さらに1945年（昭和20年）の敗戦によってその在り方が大きく変化することとなった。文部省は同年「新日本建設ノ教育方針」（文部省，1945；文部科学省，2009）を発表したが、その中には直接的に道徳教育という文言の記載はみられないものの、敗戦までの教育内容・政策について総括しその在り方を変化させることを示している（勝部・渋川，1984；江島，2016；豊泉，2016）。しかし、「日本教育制度ニ対スル管理政策」が同年に連合国軍最高司令部から示され、修身も教育することを止められる結果となった（勝部・渋川，1984；江島，2016；豊泉，2016）。文部省では、修身の教育が停止される前に修身として教育されてきた内容に関して、新たに公民教育として見直された修身と公民的知識を一本化して公民科を学校教育の中に設置する動きもみられた（勝部・渋川，1984；江

島, 2016; 豊泉, 2016)。ところがこのような形で教育形態は結果的には実現に至らなかった。しかし, 学習指導要領一般編(文部省, 1947)に新設された社会科の中で, 修身・公民・地理・歴史などの教科の内容を融合して, 一体として学ばれなくてはならない, との表現がなされているので, 教科は道徳という名称ではないが, その萌芽が示されていると考えられる。1950年(昭和25年)に第二次米国教育使節団の報告書(勝部・渋川, 1984; 江島, 2016; 豊泉, 2016)において, 「道徳教育は全教育課程を通じて, 力説されなければならない」との表現があり, 道徳として教授する時間を特設するのではなく, 学校の全面において行うことが適当であるとの考えが示されたとみられる(江島, 2016; 豊泉, 2016)。

その後, 我が国は国際的に承認されて, 自立の道を模索していくが, その中で道徳教育もまた変化を遂げていく。文部省は道徳教育については, 社会科をはじめ学校教育全体として指導計画を周到に図り教育のあらゆる機会を通して徹底を図るべきとの指摘がなされていた(江島, 2016; 豊泉, 2016)。しかし1958年(昭和33年)になされた教育課程の改定によって, 学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を補充・深化・統合するための時間として, 小・中学校の教育課程の一領域としての「道徳の時間」を特設した(文部省, 1958)。この特設によって, 社会科から独立した科目として位置付けていくこととなった。独立した科目となった道徳であるが, 我が国の社会経済的な影響を受けながら, また形を変えていくこととなった。その中で「心の教育」が重視され, 2002年(平成14年)「心のこころ」のノート」という教科書でも副読本でもない新たな活用を求める冊子が作成された(江島, 2016; 酒井・田中・中村, 2017)。これは道徳教育に心の教育を重視することをより一層強固なものにしていると考えられ, それまで, 行われてきた道徳教育を変化させ

る1つのポイントであると考えられる。

また, 2014(平成26)年の中央教育審議会「道徳に係る教育課程の改善等について(答申)」(2014)において「特別の教科 道徳(仮称)」として位置付けることが明確化され, さらにいじめ問題に端を発した, いじめに正面から向き合う「考え, 議論する道徳」への転換に向けて(文部科学大臣のメッセージ)について(平成28年11月18日)(文部科学省, 2016)から「考え議論する道徳」といった指針も明確化された。

さらに, 平成28年に道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議は「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について(報告), という文書の中で, 今回の経過について, 前述の答申に触れるとともに, 道徳教育の現状を踏まえて, その問題点を列挙するとともに, 学校教育全体で行う道徳教育と, その要となる道徳科の時間の重要性, また, 求められる道徳教育の質的転換を指摘している(道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議, 2016)。

3. 道徳教育の中で「役割演技」の果たす役割

道徳教育の中で「役割演技」が果たす役割について考えるために, 近年の道徳教育の流れをまとめてみると, 先に指摘したような「心のこころ」のノート」以降, いじめ問題など, 心理学的視点が従来よりも僅かながら重視されるようになってきたのではないかと考えられる。その意味で, 心理学に連なる「役割演技」は理解されやすくなったと考えられる。また, 道徳教育の教科化に至る議論の中で, 従来より「道徳の時間」を要として学校教育活動の全体を通じて行われるとされてきた教育課程を踏まえた上で, 道徳に特化した時間「特別の教科 道徳」の意義や役割の明確化が求められている(道徳教育に係る評価等の在り方

に関する専門家会議，2016)。

また専門家会議では，科目の特質を踏まえ，従前から行われてきた，所謂生活経験の話し合いや，読み物教材の登場人物の心情理解(読み取り)といったねらいや主題が不明確な指導は避けるとの指摘がなされている一方で，問題解決的学習・体験的学習などを含めた質の高い成果のある指導方法を模索することも提言している(道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議，2016)。

道徳についての具体的な指導方法としては

①～③を以下に示す。また以下の箇所は，道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議(2016)より引用したものである。

① 読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習

例示されているのは，教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通し，道徳的諸価値の理解を深めることについて効果的な指導方法であり，登場人物に自分を投影して，その判断や心情を考えることにより，道徳的価値の理解を深めることができる(道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議，2016)。ここでは多面的・多角的にどのように学習参加者に考えさせることができるがポイントになると考えられる。いかに自分に投影させるかという部分は大切であると考えられる。

② 問題解決的な学習

児童生徒一人一人が生きる上で出会う様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができる。問題場面について児童生徒自身の考えの根拠を問う発問や，問題場面を実際の自分に当てはめて考えてみることを促す発問，問題場面における道徳的価値の意味を考えさせる発問などによって，道徳的価値を実現するための資質・能力を養うことができる(道徳教育に係る評価等の在り方に関する専

門家会議，2016)。ここではどのような発問を行うか，という点が重要になると考えられる。発問の内容によってはかなり根源的な道徳的価値に触れることができる可能性があると考えられる。

③ 道徳的行為に関する体験的な学習

「役割演技」などの体験的な学習を通して，実際の問題場面を実感を伴って理解することを通して，様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができる。

問題場面を実際に体験してみること，また，それに対して自分ならどうという行動をとるかという問題解決のための「役割演技」を通して，道徳的価値を実現するための資質・能力を養うことができる(道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議，2016)。主体的に解決するということが，体験を通じて直感的に理解される可能性が高いことも考えられる。

一方，小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編にれば(文部科学省，2017)，道徳科の特質を理解することが重要であることが示されている。具体的には 児童一人一人が，ねらいに含まれる一定の道徳的価値について，理解することがまず求められている(文部科学省，2017)。道徳的な複数の価値について児童一人一人がそれぞれの理解を大切にすることを生徒の立場から具体的に考えてみると，一人一人がそれぞれ自分自身について理解を深めていくことが必要になる。つまり自分と向かい合うことが必要になると考えられる。他の人がどのように考えているかということではなくて，自らがどのように道徳的価値をとらえているのか，その理解度も大切であり，かつその理解に基づいた自分自身の行動についても考えていかななくてはならないであろう。

また，道徳的諸価値の理解を基に，自己をみつめ，さらに物事を多面的・多角的に考え，

自己の生き方についての考えを深める学習を行うこと（文部科学省，2017）も求められており，自分自身の考え方は大切にしながら他者の考え方，感じ方をとらえ，それをもとに個人としての生き方を考えていくことや，そのこと自体を自覚することが求められる。さらに，道徳科の学習は前記した学習を通して，内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく時間であるとされている（文部科学省，2017）。内面的資質としての道徳性は，児童が自分自身を把握する中で，自分の中にある道徳的価値や道徳としての問題意識について自覚をすることを通じて自分自身のふるまいを考えていくことができるようになることであると考えることができる。

この3つの観点を「役割演技」に当てはめてみると，例えば学級の一員として参加している児童は，一人一人が実際に演じる前には，集団の中にいるが個人的にはそれぞれが色々逡巡し，どのように発言しようなどと考えている可能性は高い。授業にしっかり参加していれば，それぞれが発言を行わなくても考え，感じていると推察される。この部分で授業に参加している児童は自分と向き合うという経験に触れることになる。さらに「役割演技」を実際に前に出て演者として，演者以外の参加している観客役割の児童の前に出てみると，一人で考えていたようには行動できない可能性が推察される。それは，現実に目の前に相手が存在し，相手との関係を考えながら，行動・発言するという部分と，それを相手と自分との間の中だけで完結するのではなくて，他人がみている・みられている環境の中でそれらが行われる体験を通じて関係の複雑さを具体的に経験することが予想される。つまり多面的な見方に結果的に遭遇することになると考えられる。また，演技をみていた立場の児童（観客役割）も，自分自身の考えと同じ場合もあると考えられるし，また違う場合もあると考えられる。どちらの場合であっても

その考えと自分の考えを改めて目の当たりになることになる可能性は高く，結果的に問題意識や内面的資質と向き合うことになることと考えられる。さらに演じていた児童も，観客役割としてみていた児童も感想や意見を求められることによって，単に教えこむにとどまるような指導や形骸化した指導（平成10年6月中央教育審議会答申，1998）に陥ることを回避し，授業参加した個人の心に響くような（早川，2004）道徳の授業になる可能性が高まるのではないかと考えられる。またそれだけではなく，現在求められている「考える道徳・議論する道徳」ということを念頭に置けば，例え絶対的な正解があったとしても，そこにたどり着く方略として児童の個人差は大きいいため，そのたどり着く方略の部分には正解が1つでない可能性が高く，そのためには知識や道徳的価値について知っているだけではなくて理解していくことを求めていく必要があると考えられる。つまり理解という部分をどのようにとらえていくかということや道徳という枠組みの中でいかに考えていくことができるかということが，「役割演技」を道徳に積極的に導入することにつながるという可能性も検討する必要がある。

一方で「役割演技」は，道徳教育の指導方法として名前は認知されているが，その運用については，教科学習等において日常的に活用されてこなかったことが指摘されている（早川，2017）。他の教科教育の過程でも共通に用いられるような指導方法であれば，教師としてその指導方法に触れる機会が多くあり，またその指導方法について積極的な興味も持ち続けることが考えられるが，「役割演技」についてはそのような環境になっていないことが「役割演技」の正しい理解を難しくしている可能性が考えられる。さらに，「役割演技」については，「演技」という語感から，決められた台詞を決められた通りに読めば「役割演技」成立と勘違いしているとの指

摘もある（早川，2017）。

4. 「役割演技」からロール・プレイングへ

役割を演ずることが、どんな心理治療的あるいは発達の意義を持っているのかという問題は現在も明確にされたわけではない（外林，1977）。一般的に私たちはそれぞれの役割を社会的に期待されていると考え、あるいは、期待された役割をそのまま受け入れて演ずることが多く行われている。それに対して、ロール・プレイングでは、役割を自発的・創造的に演ずる（外林，1977）ことが重要であると考えられている。勿論「役割演技」が学習指導要領に明記されている以上はその言葉自体を安易に変えることはできない。しかし、「役割演技」の可能性との理解を深めるためにはロール・プレイング的な考え方についても理解が必要であると考えられる。

ここで述べているロール・プレイングが、どのような要素から構成されているかについては、ロール・プレイングの立場や（台，2003）、心理劇の立場（磯田，2013）、サイコドラマの立場（高良，2013）によって、いずれも用語の記述順はあるものの、監督、補助自我、演者、観客、舞台の5つの要素が示されている。

本稿では、道徳科を「役割演技」の観点から検討してきたが、学習指導要領に記載のある「役割演技」については言葉としてはそのままである必要があっても、さらに効果的な発展を望むには内容的にロール・プレイングとしての観点から整理が必要なのではないかと考える。学校の授業の参加者である児童・生徒の関わりとしては、「役割演技」を体験することによって複数の役割を取得することができるということであると考えられている。具体的な役割の1つは、「演者」である。「演者」として役割を考え・感じて行動してみると、中心的に演ずる役割を持つ参加者と、そ

の主として中心的な役割を演ずる者と一緒に演じる役割を持つ参加者の2種類の役割があると考えられる。心理劇ではそれぞれ「主役」と「補助自我」という名称で2つの役割を区別する（高良，2013）が、教室場面ではあまり厳密には区別は行っていない。また、その演者の演ずる場面を観ている「観客」という演者以外の参加者という役割があることが理解される。そして、それらの役割は、「演者」は「観客」の役割にもなることができるし、「観客」は「演者」の役割になる可能性があることが理解される。また教師としてのかかわりを考えるときに、ロール・プレイング全体の進行や各プレイングの開始や終了など、「演者」や「観客」と異なった役割をする参加者として「監督」という役割がある。この「監督」の役割は主には教師が行うことになり、全体の進行について指示をする、決定するための役割や、演技が終わってから、「演者」や「観客」の話を聞いて場面の分かち合いをするという役割がある。この「監督」の役割を理解することが、教師が効果的に「役割演技」を行う場合、非常に大切となると考えられる。特に、「役割演技」とロール・プレイングとの関連を考えると2つの側面からの理解が求められると考えられる。1つは児童生徒の役割や動き方をどのようにとらえるかという点あり、もう1つは授業内容を伝える際のとらえ方といった2点が推察される。

1点目の児童生徒の役割や動きという点については、その役割や動きが比較的形のあるもの（所謂、筋書きがありある程度固定化されている）と考えるか、その役割や動きに決まりきった形がないもの（所謂、筋書きがなく流動化されている）と考えるのかという2つの方向性を考えることができる。2点目の授業内容を伝える際のとらえ方という点については、伝え方・或いはたどり着く解答に正しさや誤りがはっきりある（正解が1つに定まる）場合（例えば、算数・数学の正答・特

定の価値観)と、伝え方・或いはたどり着く解答の正しさや誤りが非常に主観的で一義的に定まらない場合という2つの方向性を予測することができる。この2つの方向性を組み合わせると、児童生徒の役割や動きに比較的形があり、伝え方に正しさや誤りがはっきりして正解が1つに定まる場合と、児童生徒の役割や動きに比較的形があり伝え方に正しさや誤りが一義的には定まらない場合。児童生徒の役割や動きに比較的形が無く、伝え方に正しさや誤りがはっきりして正解が1つに定まる場合と、児童生徒の役割や動きに比較的形が無く伝え方に正しさや誤りが一義的には定まらない場合の4種類に区分することができると考えられる(表1)。これを先に述べた自発的・創造的な視点で考えると、正解が1つに定まる場合は、自発的な感覚や創造的な感覚はあまり強くはない可能性が高く、正解が一義的に定まらないような場合は自発的・創造的な感覚が強くなると考えられる。また、役割や動きが比較的形のある場合は、形に合わせた動きをするためにあまり自発的・創造的な感覚は強くはないが、役割や動きに決まりきったものがなければ自発的・創造的な感覚は強くなると考えられる。

「役割演技」を理解する場合も表1に示した4つの領域のどの部分で演技がなされているかということ教師は「監督」として考えてみることは重要であり、「役割演技」のなかにロール・プレイング的な考えを入れることによって幅広い問題に対処することができるようになると考えられる。

一方、ロール・プレイングを行うには、さらに環境的な要素との関連も検討する必要があると考えられている。ロール・プレイングを行う空間は、自由に振る舞える空間として設定されていることが望ましい。自由であることは、参加者が望めばどんな場所になることもできるということである。そのような空間のことを、「舞台(空間)」と称している。

もちろん、本格的な段差があるような劇場の舞台などは実際の空間で作ることは難しいので、基本的には複数の参加者がいる程度自由に動き回る空間があれば、どこでも「舞台」として考えることが可能であるとされ、具体的には教室が舞台となると考えられる。大切なことは、ロール・プレイング実施時に「舞台」の場所を明確に区分することができることと(教室の中での舞台の場所)、その「舞台」をロール・プレイング終了時に、心の中から取り払うことができることが必要であるとされる。またロール・プレイングの進め方についても、はじめにウォーミングアップ(準備)を行ってからプレイング(劇化)し、シェアリング(分かち合い)といった段階を踏むことが多い。

このようなロール・プレイングについての考え方を教育現場で実際に「役割演技」として指導を行っている教師にどのように理解を求めていくかについての方略を探索的・試行的に探ることによって、ロール・プレイングを道徳教育の中で定着させる1つの方向性を示すことが可能であると考へ実行したのでその結果を以下に示す。

5. 試行的調査

これまで述べてきたように、「役割演技」やロールプレイング¹⁾は、一般的な教育研修の中で、研修技法としては比較的实施が簡便であり、営業などの分野では頻繁に実施されている技法であるとの指摘がなされている(菅谷・宮崎, 2013)。この「役割演技」とは、一般的にはロールプレイングと同義で捉えられていることが示されている(松村, 2017)。また、一般的な教育研修の考え方としてロールプレイングは接遇などの基本的な部分で使用されている事実があり(菅谷・宮崎, 2013)、実施のハードルはそれほど高くない可能性が推察される。一方、先に指摘してき

たように道徳が教科化された現状の中で、今まで比較的实施されることがなかった「役割演技」に対して積極的に評価がなされ（文部科学省，2017），より具体的に授業に生かすことが求められていると考えられる。この現状を基に「役割演技」について検討することは，現在教育現場に求められている「役割演技」に必要な部分を明らかにすることができると考えられる。

【問題】

教育の中で「役割演技」を実施する場合，どのような点に注意する必要があるのか。心理学的領域において，現在進められている心理劇・ロール・プレイングについての研究を基に，学習会で供覧され，使用された授業資料，当該学習会のヒアリング結果などを基に検討を進める。

【結果と考察】

ヒアリングの対象とした学習会は，現役教師とロール・プレイングの研究者が定期的に行っているK学習会であった。（現職教員2名（小学校），学校カウンセラー（1名），大学教員（2名）（男性2名，女性3名），その中に提出された事例を検討の対象とした。学習会の中で，毎回討論の対象となった中心的な話題を基に以下に検討を加えた。また，研究を進めるにあたり，本人と本人の実践した内容に対するプライバシーには十分配慮し，日本心理劇学会の倫理綱領に準拠した取り扱いを行った。

① 用語に関する部分

「役割演技」実施の際に問題点となると考えられたのは，まず「役割演技」という言葉自体であった。上述したように，「役割演技」は，言葉としては一般的なロールプレイングと同義として考えられている。この言葉としてのロールプレイングについては，ロールとは，役割，役目，任務のことを指しており，プレイングとは，遊ぶこと・遊戯・競技すること・競技やその技・演劇・芝居・演奏

すること・演奏等といった多義的な意味がある（松村，2017）。加えて，心理学の中では，Psychodrama（心理劇）はモレノを創始者とし（江橋，1971），本邦では外林（1950）は，心理劇について，人の自発性を発揮させ，社会的な拘束をとりのぞき，今までの自分の殻を破って，あたらしい世界を興ようとするものであると論じている。また，ロール・プレイングについては，役割は機械的にとらわれているのではなく，創造的に演じられ（Role-playing）ており，役割が演じられることが自発性にほかならない（外林，1955），ということが示されている。一方，Corsini（2004）によれば，ロールプレイングという用語は，1. 演劇上のもの。役者が台本のもと，ある場面を演じること。娯楽のためのもの。2. 社会学上のもの，社会規範によって規定された行動パターン。3. 偽装的なもの，真の緊張や感情や動機と全く逆の行動をとることによって，人々をはぐらかそうとする偽の行動。4. 教育的なもの。自己理解や技能の向上，行動の分析のために，人々の前で，ある人がどう振る舞うのか，振る舞うべきかを示すように，想像上の場面の中で演ずること。というように分類することも可能である（Corsini，2004）とされている。このような状況を踏まえて，今後学校現場で行われる「役割演技」については，ある行い（行為）を練習することに重きを置くのではなく，児童生徒自身が自発的に自らの振る舞いについて，どのように自分から組み立てていくことが可能か，という点を中心に，自らが集団と個人の間をを考えていく切っ掛けを作る，ということの主眼とする方向性がより重要になるのではないかと考えられる。多様性を持って語られる「役割演技」について，実施する側の教員が，一体何をどのような意味で実施しているかを再度吟味する必要が今後求められることが推察された。

② 集団としての関わりについて

「役割演技」が行われる場合は、集団と個人の関係について意識を向けることが、授業を行う授業者の立場であれば毎回繰り返されることが体験され、また授業に参加している児童生徒の立場であっても講義の後の感想から授業者と同様、集団と個人の関係について意識を向けることを体験したことが明らかになった。特に「役割演技」が行われる場合、参加者の児童生徒の中で、ある場面の演技を行う役割を、観客役割の参加者の前で行っている（演じている）時点では、演者役割の参加者は観客役割の集団と対面・対峙することになると考えられる。その状況の中で、前述のように演技を行う児童生徒は自ら考え、自発的に「役割演技」を行うことが重要になるが、その時点で対象の児童生徒個人が「役割演技」が抵抗なく行えるように、その場を共有している参加者全員が「役割演技」を行う状況や場面（場所）について、それら環境についての調整を行う必要を感じ、少しずつでもそれを実行することが重要となろう。例えば一般的な学級で「役割演技」が行われる場合、友人関係が生まれていたり、関係が薄い人間関係を持っていたりする児童生徒が存在する中で「役割演技」が行われる可能性は高い。その場合に行われる場面自体や、そこでの見方・感じ方が、そのままの現実（学級）でなく、「役割演技」の中の世界で行われていることについて、参加者全員が十分に理解した上で「役割演技」が実行されれば、自らの人間関係から良い意味で逸脱することができたり、新たな視点や感じ方を体験できたりすることが可能になると考えられる。そのため大切なことは、演ずる者や観客側の状態を良く観察して十分調整することが教師として必要である。現実の教室場面から「役割演技」をしている場面へと変化していくことについて、少しずつ慣れるように丁寧に移行していくことが重要であろう。加えて「役割演

技」を演ずる場所についても注意を払うことが必要になると考えられる。例えば、幅の広いテープなどを用いて、場所を区切り、区切ったその中は教室ではあるが、自由などんな所にも設定できる、所謂現実の教室でない（場面）、ということを理解した上で「役割演技」を行うことが演ずることを選択した児童生徒と観客役にとって彼らを危険な事態から守るために大切になると考えられる。しかし、実際には現実のまま何も手を加えられることなく「役割演技」がいきなり実施され、実施前後の配慮もなく繰り返し実行されてしまうこともあることが明らかになった。このような、実際には必要な状態観察や調整が行われず、形として「役割演技」が行われてしまうことについては注意を払う必要がある問題であると考えられる。

③ 役割の固定化に対する回避努力

「役割演技」を行うことを通じて、参加した児童生徒は、それぞれ自らの役割を固定的に考えることなく、多様性を持った役割であると認識し、考える切っ掛けとすることが可能であると考えられる。この部分が、道徳科の表現活動とされる指導方法（文部科学省,2017）の中で、劇化・動作化・疑似体験と「役割演技」の差異であると考えられる。私たちは自らの振る舞いについては、多様性に富んでいると比較的考えがちであるが、児童生徒がいつも行っている振る舞いのなかに、その時々に応じた即興性の要素を持ちながら実際の行為を行っている。しかし一方で、自らの振る舞いについて、その多くのパターンについて記憶し、その記憶を用いて自らの振る舞いを決定していくので、自らの振る舞いとしての役割は固定的になっていく可能性が高くなる。また、その場その場で行動が変化していることを意識しにくい点が多いと考えられる。しかし、いくら振る舞いのパターンを記憶し、その行動パターンに基づいた振る舞いや反応であっても、厳密にはそれ

ぞれの振る舞いや反応は一回毎にしか生起しない。そして、そのような厳密さは実際には記憶として残る可能性は低く、自らの役割を変えるのをためらい、同じ振る舞いのパターンを繰り返し、自らの考え方を固定的に捉えていくことが多いと考えられる。「役割演技」を行うことによって、自らの役割の幅を広げることが意識してみることは役割の固定化を防ぐ可能性を高めるであろう。

【まとめ】

①・②・③共に、「役割演技」を既に回数を重ねて実行している者にとっては、自明のことであることがほとんどであると考えられるが、現在の急激な道徳を取り巻く環境変化を考えると、今一度、そのような基礎的な部分からの情報提供が求められると考えられた。今回は、勉強会のメンバーの発言に基づいているが、厳密な定量的解析は行えなかったため、今後その発言内容に関して定量的なデータを示しながら分析・解析を行い、さらに精緻な状況について分析を行うことが求められる。

6. 考察とまとめ

本研究では、道徳教育の効果的な実施を検討する際に道徳教育の変遷とその現状をまず指摘した。前述したように、道徳教育は現在の形までたどり着くまでに紆余曲折はあったが、現在の形もこれが最終形というわけではなく、これからも時代の変化に合わせて変化していくことは必要なことである。その現状を踏まえた上で、教師が学校教育の中で道徳教育を実践していく中でさらなる知識・実践両面での授業実践時のレベル向上が求められたため、道徳教育の現場で実践可能な手段としての「役割演技」を基にして効果的な技法としてロール・プレイングを用いた可能性と実効性についての研究の端緒とすることを目的として検討を行った。

学校教育はその成り立ちから考えても、多くの教科で同様の方略で知識内容を伝達することが多く行われているが、道徳科は教育内容から一般の科目とは多少異なっているため歴史的事実を踏まえておく必要がある。またわが国固有の歴史的経緯もあり、道徳教育に対しての理解・対応もかなり個人差が予測される。そのような状況ではあるが、現在を含め今後の道徳教育の方向性として、より質の高いかつ妥当性・信頼性の高い方略を検討していくことが文部科学省より提案されている現状があるが（道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議，2016）、多忙を極める教員がそれらの方略を効果的に身に付け実践していくことはなかなか難しいことではないかと考えられる。そこで、現場で教鞭をとっている教師を中心に協力を求め、道徳科の中で「役割演技」を実施する場合、どのような点に注意する必要があるのか。心理学的領域において、現在進められている心理劇・ロール・プレイングについての研究を基に、学習会で供覧され、使用された授業資料、当該学習会のヒアリング結果などを基に検討を進めた結果、①用語に関する部分、②集団としての関わりに関する部分、③役割の固定化を避ける努力を行う、という3点が問題点として示された。これらの問題点はある意味「役割演技」を理解するうえで重要になってくる視点でもある。例えば①の用語について考えてみると、用語としての理解がまだまだ十分ではない可能性や意味が正しく伝わっているかという点をさらに詳しく検討する必要がある。②に示された集団としてのかかわりについては、学校がなぜ存在するかということに関わる重要な点であり、教師ならば少なからず頭に置いている問題であろうが、それをどこまで意識化しているかという点で今後さらに内容を検討する必要があるといえる。また③については、教師が児童・生徒との関係を考えるとき、安定する方向に導いていくことは必

要なことであるが、一度安定した関係はなかなか変容することは難しいと考えられる。しかし、人間関係は動的なものであるため、関係を固定化して考えてしまうと本来動的な関係性を持つ人間関係に十分対応できない恐れも考えられる。しかし、方向性としては評価も含めて今後は、科学的根拠に基づいた効果的で継続的な質の高い教育を提供していくための検討を続けていくことが必要であり（道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議，2016），その実現に向けた対応が求められている。そこで、「役割演技」を正しく理解するためには、ロール・プレイング的な見方²⁾も導入することが重要なのではないかと考える。従来の「役割演技」にとどまることなく、ロール・プレイングの理解を促進する4つの類型（表1参照），①児童生徒の役割や動きに比較的形があり，伝え方に正しさや誤りがはっきりして正解がある場合，②児童生徒の役割や動きに比較的形があり伝え方に正しさや誤りが一義的には定まらない場合，③児童生徒の役割や動きに比較的形が無く，伝え方に正しさや誤りがはっきりして正解が1つに定まる場合と，④児童生徒の役割や動きに比較的形が無く伝え方に正しさや誤

りが一義的には定まらない場合，について，実際に道徳教育の中で進めていく「役割演技」の内容を当てはめて考えることによって「役割演技」を基にしたロール・プレイングについての理解を促進することができるのではないかと考えられる。例えば，伝えたい内容が明確で，正解不正解がはっきりしているような授業場面を扱う場合その特性を生かして「役割演技」を組み立てる必要がある，その場合，①に示されたような特性に留意する必要がある。これらをしっかり吟味して現在の急激な道徳教育を取り巻く環境変化を考えると，さらに精緻な分析を続けながら，効果的な情報提供と実践事例の提示を行っていく必要があると考えられる。

【謝辞】

勉強会参加者，勉強会参加者の実践にご協力いただいた，児童生徒，保護者並びに研究継続にご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。本論文の内容の一部は日本応用心理学会第86回大会，日本心理劇学会第23回大会で発表を行った。また研究行うにあたり，日本大学商学部より研究助成を受けた。記して感謝する。

表1 「役割演技」とロール・プレイング

	伝え方・或いはたどり着く解答に正しさや誤りがはっきりある（正解が1つに定まる）	伝え方・或いはたどり着く解答の正しさや誤りが非常に主観的（正解が一義的に定まらない）
役割や動きが比較的形のあるもの（所謂，筋書きがあり，ある程度固定化されている）	① やり方・方法の理解（強まる） 体系的に理解（強まる） 答え合わせ的感觉（強まる）	② やらされている感じ（強まる） 不安（強まる）
役割や動きに決まりきった形がないもの（所謂，筋書きがなく，流動化されている）	③ 混乱する可能性（強まる） 意味が伝わりにくい（強まる）	④ 変化を体験する（強まる） 体験的に理解（強まる） 創造性（強まる）

(注)

- 1) 本稿でロールプレイングという表記を用いる場合は、一般的に(現在広く普及している)教育手法を指します。ロール・プレイングは現在の現実的に行われていることを発展させ、外林(1977)の観点を積極的に取り入れた考え方であるとします。
- 2) ロール・プレイングの見方とは、ロール・プレイングそのものではないが、ロール・プレイングの観点を伴った人間関係などに

対する見方のこと。ロール・プレイングは演者・観客・監督などの人的要因と、舞台などの環境的要因がそろわないと実行できないが、それらを、仮想的にとらえて、何か考える対象が生じたときに、自分自身の中で、演者・観客・監督それぞれの役割に立って考えてみることや、その場所について、現実に縛られることなく創造的に考えてみることを積極的に行うことによって創造性、即興性、一回性を改めて考えてみること。

(引用参考文献)

- 磯田雄二郎(2013)『サイコドラマの理論と実践 教育と訓練のために』 誠信書房。
- 今枝弘三(2014)『道徳教育の理論と方法—実践例とともに—』静岡学術出版社
- 台 利夫(2003)『新訂ロールプレイング』日本文化科学社
- 江島顕一(2016)『日本道徳教育の歴史 近代から現代まで』 ミネルバ書房
- 江橋照雄(1971)『道徳指導シリーズ14 役割演技』 明治図書
- 海後宗臣・仲新・寺崎昌男(1999)『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍。
- 勝部真長・洪川久子(1984)『道徳教育の歴史 修身科から「道徳」へ』 玉川大学出版局
- 酒井郷平・田中奈津子・中村美智太郎(2017)「道徳教育の史的変遷と現代的課題—道徳科における情報モラル教育の可能性—」『静岡大学教育学部研究報告・人文・社会・自然科学篇』67, 105-119。
- 中央教育審議会(2014)『道徳に係る教育課程の改善等について(答申)』中央教育審議会 平成26年10月21日 <https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2014/10/21/1352890_1.pdf 2019年12月21日閲覧>
- 菅谷新吾 宮崎総子(2013)『何だ! そうやるのか ロールプレイングマニュアル』日刊自動車新聞社。
- 外林大作(1950)『性格の診断—プロジェクトィブ・メソッド—』牧書店。
- 外林大作(1955)『改訂 性格の診断 プロジェクトィブ・テクニック』牧書店。
- 外林大作(1977)「ロール・プレイング」依田新監修『新・教育心理学事典』金子書房。
- 高良 聖(2013)『サイコドラマの技法 —基礎・理論・実践—』岩崎学術出版社。
- 豊泉清浩(2015)「道徳教育の歴史的考察(1)—修身科の成立から国定教科書の時代へ—」『教育学部紀要』49, 27-38。
- 豊泉清浩(2016)「道徳教育の歴史的考察(2)—「道徳の時間」の特設から「特別の教科道徳」の成立へ—」『教育学部紀要』50, 243-254。
- 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議(2016)『「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について(報告)』道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議 平成28年7月22日 <https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/08/15/1375482_2.pdf> 2020年1月10日閲覧>
- 早川裕隆(2004)『シリーズ・道徳授業を研究する 1 役割演技を道徳授業に』 明治図書

- 早川裕隆 (2014) 『道徳科授業サポート BOOKS 実感的に理解を深める！体験的な学習「役割演技」でつくる道徳授業 学びが深まるロール・プレイング』早川裕隆編著 明治図書
- 早川裕隆 (2017) 「教育における心理劇のチャンスと危機～教科化される道徳での「役割演技」の現状と課題～」『日本心理劇学会第 23 回大会抄録集』 21
- 松村明 (編) (2017) 『デジタル大辞泉』 小学館
- 文部省 (1947) 『学習指導要領 一般編』(試案) 昭和二十二年度 1947 年 3 月 20 日 <<https://www.nier.go.jp/guideline/s22ej/index.htm>, 2020 年 2 月 15 日閲覧>
- 文部省 (1958) 『小学校学習指導要領』 昭和 33 年改訂 文部省調査局編集 『「文部時報別冊」文部省 1958 年 10 月 1 日 <<https://www.nier.go.jp/guideline/s33e/index.htm>, 2020 年 2 月 15 日閲覧>
- 文部省 (1968) 『小学校学習指導要領』 付 学校教育法施行規則 (抄) 昭和 43 年改訂 文部省 1968 年 7 月 11 日 <<https://www.nier.go.jp/guideline/s43e/index.htm>, 2020 年 2 月 15 日閲覧>
- 文部科学省 (2009) 『新日本建設ノ教育方針 (昭和二十年九月十五日)』 1981 年 9 月 5 日 <https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317991.htm, 2020 年 2 月 15 日閲覧>
- 文部科学省 (2016) いじめに正面から向き合う「考え、議論する道徳」への転換に向けて (文部科学大臣メッセージ 平成 28 年 11 月 18 日) 2020 年 3 月 17 日 <https://www.mext.go.jp/content/20200305-mxt_kyoiku02-100002180_1.pdf 2020 年 4 月 15 日閲覧>
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別の教科 道徳編』 2019 年 3 月 18 日 <https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afildfile/2019/03/18/1387017_012.pdf 2020 年 2 月 15 日閲覧>
- Corsini, R. J. (1966) 『Roleplaying in Psychotherapy A MANUAL.』 Aldine.N.Y. (金子 賢 (監訳) 船田英世・猿山浩 (訳) 『心理療法に生かすロールプレイング・マニュアル』 金子書房。

(Summary)

This study examines the possibilities for the use of role-playing in moral education.

First, the paper reviews the historical background of moral education, which was closely related to the development of modern education in Japan. However, moral education has a tumultuous past; it was caught up in the flow of events that lead to Japan's defeat in the Second World War after which the modern education system was established. This study raises the possibility of re-acknowledging the need to provide moral education in view of the current educational environment. Therefore, possibilities for the use of *yakuwari engi* (the Japanese term for role-playing) in the context of providing moral education are considered. Moreover, to further effectively promote learning in moral education, the relationship between the Japanese concept of role-playing (*yakuwari engi*) and "role-playing" in the English-language sense were examined. This analysis indicated that, if this application of role-playing is to be developed in the future, it will be necessary to focus on points such as (1) the phrase *yakuwari engi*, (2) involvement in group interactions, and (3) avoidance of the entrenchment of roles. Possibilities were examined for incorporating role-playing in moral education through the process of improving on these points.